

複層の物語を読む

選曲をめぐる記憶の詩学

店舗で、テレビで、オフィスで、生活が音楽で彩られている。この消費社会の申し子は、品物や空間に趣を添えるだけでなく、私たちの生にもまた働きかけてくる。著者が述べるとおり、それは時間と空間とともに「織り合わされ」、「二一世紀の現実を生きる私たちの人生を固有にする」(四頁)。つまり、音楽は、混沌なる生の中から一場面を分節し、そこに意味と、記憶を引き出す手がかりとを付し、のちに自らの足跡を辿る契機を私たちに与えてくれるのだ。

思えば、何がこの豊かな体験を支えるのか。近代以来、指摘されるのは作曲家が常であった。一方、ここで選曲の営みへと眼差しを向けるのが、長年、文化界の前線に身を置き、現在は大学でメディア論、表現文化論、広告広報論を講ずる著者・君塚洋一氏である。本書で主に論じられる選曲家とは、日本の都市文化に漂う文化的コードを察知し、輸入レコード店などに眠る膨大な洋楽の中からそれに相応しい音を「掘り」あてて、店舗の場において私たちの耳へ届ける人々である。必ずしも専門者に限らない。雑誌編集者、カフェ経営者、クラブDJ、アーティストと普段の立ち位置は様々だ。しかし、彼らは、皆一様に、「洋楽かぶれ」という共通項を持つ。

今日のカフェに聞く選曲スタイルの主潮が現れた契機について、著者は、二一世紀の幕開けの頃の専門者の領分へのクラブDJ達の参入を指摘する。従来のディスコDJの演出にみる客への直接的な働きかけを排し、八〇年代半ばに現れたクラブDJたちは、対照的に、まるで間接照明のごとき趣向をもって洗練された空間を作ること企図し、あらゆるジャンルから豊かな記号性をもつ音楽を発掘するスタイルを新たに確立した。これを基調に、六〇年代以来、音楽の街・東京渋谷に根付く往年の洋楽への目配りが利いた軽快でレトロモダンな趣向に加え、そこにブラジリアン・ジャズを加味したような音が、今日のカフェの空間を満たしているという(第一章・第二章)。選曲文化の形成過程を論じた冒頭二章にはじまる本書全体を俯瞰すると、およそ二〇世紀の半ばから今日までの日本の都市空間において、そこでの選曲家たちの営みに加え、遡ってそれが可能となるための文化的素地の形成過程について、著者が思う歴史的転機を取り上げながら紀伝体で綴った書と言える。

しかしながら、タイトル通りの側面のみで執着して論旨を追うならば、本書固有の興味を取りこぼすかもしれない。例えば、第一章にみる八〇年代の著者や後のDJらに差し響いた、かの薄明の進取なFM音楽番組のくだりは魅惑的だが、論構造から見ると私的挿話にして要約に入れ難くなる。また、冒頭の二章以降に内容の振幅を感じる向きがあるかも知れない。けだし、本書には、テキスト表層の隙間から仄見える深層海流のごとく流れる一貫した基層の物語があり、その流れと色合いとが、固有の文脈を持つ表層のテキストと混淆し、全体で複雑な奥行きをもつ表象を生んでいるようだ。

その趣向は、早速、示導動機のごとく冒頭に予告される。ある日、スーパーマーケットでの音楽に聞いたカエターノ・ヴェローゾの歌によって著者は本書を書き出す。「静かな浜辺や椰子の葉陰を後に収監され、祖国ブラジルを追われた。でもなぜ、今の自分があの時より少しばかりブルーなのか、ぼくにはわからない…」(三頁)。直前の文脈を加味すると、憂鬱を歌詞に託す亡命歌手の思いを提示するこの一文は、まず、読者にこれを客観的に紹介するかのごとく三人称視点ではじまるが、次第に下層に重ねられた著者自身の心情の一人称が透けて見えてくるかのようだ。このグルーミーの内実は、「あとがき」に述べられた執筆の出発点としての「衝動」(二六四頁)に手蔓が見いだせる。「自己自身をつくったとさえ思えるできごと」を「書き記しておかずにはいられない」と感じた著者のパトスが、ここで高橋和巳を引きながら示される時、それが、大きな物語が消失して久しくもなお、誰もが生において求めてやまない「自己の〈核〉」への渇きに根差していることは明らかであろう(高橋和巳「自立と挫折の青春像」、『人間にとって』、新潮文庫)。

読みの「快樂」において著者に許しを乞い、ここで「含意された作者」をテキストの奥に見るのも、複層の奥行きに輪郭を見る方途の一つかもしれない。自らの記憶と結びついた、そのあまりにも美しい記号を、つまり、七〇年代付近の洋楽とそれがもたらす表象とを、長く自らの絶対的「核」として生きてきたここでの架空の「作者」は、しかし、人生の哀歎を重ねたある時期から、それが美しすぎるがゆえに、日々散文的世界に対峙し変容を余儀なくされる現在の心には、その美のままに抱え込むのがついに困難となり、ゆえに、今、あらためて自己に適う形でのこの記号の内的再定位への「衝動」に駆られている。その時、まるで恋人の故郷を訪れるかような眼差しをもって横浜・本牧の歴史を巡り、出会いの記憶を整理し、かつては触れ難く絶対的であった美に、今こそ実態を重ねることで新たなリアリティを得ようとする「作者」が辿る深層での道行きが、私たちの前に自ずと示されてくるだろう。

いずれにせよ、「あとがき」に読める通り、本書の基層において、著者が自らの足跡に視線を向けて

いることは確かである。その際、音楽に話が及ぶのは、畢竟、その豊かな記号性ゆえであり、したがって、それを「掘り」出して著者や私たちの耳に運ぶ選曲家の営みは、私たちの生を作りあげる淵源ともなり得ると言って過言ではない。深層における著者の探究としての「地」は、ゆえに、多義図形のごとく、本書において選曲文化という「図」を自ずと描き出すのである。この複層の物語を著者と共に辿ることは、私たち各自の生の記憶の一端が、あるいは他者が見いだした音楽の記号性において映えた恣意的なものかもしれないこと、音楽世界独自の相対的自律性が記憶の中へ横滑りしているかもしれないこと、そしてその限りで、記憶が絶対的ではなく、再定位の可能性にも開かれてもいることに想像力を巡らせる契機となるように思う。

(女子美術大学・音楽文化論)

初稿：2018年6月25日

改訂：2018年7月17日

石井 拓洋

「図書新聞」(2018年9月15日付・第3367号)のために

takuyo.ishii(a)gmail.com

君塚洋一氏 『選曲の社会史：「洋楽かぶれ」の系譜』東京：日本評論社、2018年（3月31日第1版第1刷発行）。